

D. H.ロレンスの「木馬の勝ち馬」覚書き — オカルティズム —

豊 国 孝

i

1926年9月に出版されたD. H.ロレンスの“The Rocking-Horse Winner”「木馬の勝ち馬」はオカルト的要素の非常に強い短編といえる。もちろん、ロレンスは『てんとう虫』*The Ladybird* (1923) 中の「てんとう虫」、「狐」“The Fox”、「大尉の人形」“The Captain’s Doll”、「愛らしい女」“The Lovely Lady” (1927)、そして「馬で去った女」“The Woman Who Rode Away” (1928) や、『逃げた雄鶏』*The Escaped Cock* (1929) (これはロレンスの死後、『死んだ男』*The Man Who Died* というタイトルで出版される) などのオカルト的な要素をもつ小説を書いている。

とくに、「木馬の勝ち馬」はアスキス夫人 (Lady Cynthia Asquith) の「ゴースト・ストーリー」のために書かれたので、超自然的な事件を描いているといえる。主人公が木馬を用いて競馬の勝ち馬を予想するという話しは、ロレンスのオカルティズムへの関心を表していると思われる。この作品は「完璧なストーリー」¹であり、「もっとも良く知られて、賞賛されたもの」²であるが、Graham Hough のいうように、技巧的だがロレンス的でない作品、“most skillfully done, but quite outside the range of Lawrence’s usual work”³ ともいえよう。また、ディケンズの寓話として *Dumbey and Son* との類似点を論ずる作品論もある。⁴ この小論ではロレンスとオカルティズムというテーマをとりあげて、「木馬の勝ち馬」を分析してみたいと考える。

エドワード・A・ティリアキアンはオカルティズムを以下のように述べてい

る。

「オカルティズム」という言葉で私が理解するのは、以下のような性格をもつ意図的な実践、技法、操作である。まずそれは、(a) 近代科学に基づく手段では測定も認識もできない、自然ないし宇宙がもつ隠れたあるいは秘められた力に訴える。そして、(b) 何らかの経験的な成果を目指し、意図する。たとえば、具体的事件の未来の帰結についての知識を得ることとか、ある種の実践によってそうした帰結を変化させたりすることとかを目的とする。⁵

それは「精神にとって理解できぬ神秘的なもの」⁶であり、人間精神の地下世界でもある。オカルト的なものは、西欧における土着的なもの、キリスト教に対立するもの、人間精神の暗部のシンボルでもある。⁷このような思想が注目を集めるようになったのは、近代科学の合理主義にたいする反発と、新たな価値体系を求めたためでもあった。それは感性理論の復活であり、失われた「始原」の意味と至福を回復しようとする衝動であった。⁸またオカルティズムは、「日常性の狭隘さから脱出するための簡単で直接的な方法である。...「オカルト」の研究者はただちに内側へと向かって、自己の潜在意識的な深みにまで到着しようとするのだ。」⁹以上、オカルティズムについて概略を考えてきたのであるが、知性や知能だけを発達させるかわりに、感性や別の力を発展させるという主張をしたロレンス文学との接点があるのではなかろうか。

ii

「木馬の勝ち馬」の冒頭は、以下のように書かれている。

There was a woman who was beautiful, who started with all the advantage, yet she had no luck. She married for love, and the love

turned to dust. She had bonny children, yet she felt they had been thrust upon her, and she could not love them.¹⁰

この簡潔で皮肉な書き出しは、「島を愛した男」や『死んだ男』といった短編小説と同じように、童話や寓話の手法が用いられている。家柄もよく、美人で可愛い子供にも恵まれたヒロインは、幸せではないのだ。それは実は彼女自身の心の中にその理由がある。彼女は立派な家に住み、使用人を使い、体面を気にしながら生活する女性であるが、子供たちを愛せず、収入以上の生活をしている。だから絶えず金銭が不足している。

And so the house came to be haunted by the unspoken phrase: *There must be more money! There must be more money!* The children could hear it all the time, though nobody ever said it aloud. They heard it at Christmas, when the expensive and splendid toys filled the nursery. Behind the shining modern rocking-horse, behind the smart doll's house, a voice would start whispering: *There must be more money! There must be more money!* (pp. 230-231)

家も木馬も玩具もすべてが「もっとお金が必要だ、もっとお金が必要だ」とささやき始めるのだ。子供たちも皆そのささやき声をはっきりと聞く。主人公ポール (Paul) はその無気味なささやきを消してしまいたいのだ。というのは、これが家庭にあるとポールが期待する親と子の関係、かれが憧れる人間関係を犯すからだ。このシーンは繰り返されるのだが、無気味なオカルト的要素が支配する場面といえよう。しかし、じつは、この家のささやき声はヒロインである母親の心の叫びでもあろう。中流家庭の体面を保つために、いつも無理をして金を浪費する彼女の見栄と不満がオカルト的、超自然的現象となって現れ、子供たち、とくに長男のポールを脅かすことになる。こうした恐怖から逃れるために、ポールは母から幸せとは何か、どうすれば母が満足できるかを聞き出

そうとする。

The boy was silent for some time.

“Is luck money, mother?” he asked, rather timidly.

“No, Paul! Not quite. It’s what causes you to have money.”

“Oh!” said Paul vaguely. “I thought when Uncle Oscar said *filthy lucker* it meant money.”

“*Filthy lucre* does mean money,” said the mother. “But it’s lucre, not luck.”

“Oh!” said the boy. “Then what *is* luck, mother?”

“It’s what causes you to have money. If you’re lucky you have money. That’s why it’s better to be born lucky than rich. If you’re rich, you may lose your money. But if you’re lucky, you will always get more money.” (p. 231)

母と息子の会話からポールには、母が一番重きをおいているものは金であるということが分かる。この金にたいする執着が親子の正常な関係を歪めているのである。息子は母親にむかって「ぼくはついているんだ (a lucky person)。神様がぼくに教えてくれたよ」(p. 232) という。このことは、Colin Wilson のいうように、人生には、眼や日常の感覚に触れる事柄より多くのもの、はるかに多くのものがあるという直感に基づいていることを示している。¹¹かれは自分の勘や直感を信じて、幸せ探しの方法を求めらる。

He wanted luck, he wanted it. When the two girls were playing dolls, in the nursery, he would sit on his big rocking horse, charging *madly* into space, with a *frenzy* that made the little girls peer at him uneasily. *Wildly* the horse careered, the waving dark hair of the boy tossed, his eyes had a *strange glare* in them. (italics mine) (p. 232)

ポールは木馬に乗り、競馬の勝ち馬の予想をすることで、幸せを手に入れようとする。引用からも明らかなように、かれは「狂ったように」、「狂乱の態で」、「荒々しく」、「奇妙にギラギラした眼つきをして」木馬をこぐのである。Ad de Vriesの『イメージ・シンボル事典』によれば、馬は豊穰性や生命力¹²を表すが、ロレンスもかれの作品の中で、馬をそういったもののシンボルとして用いている。しかし、この短編でポールの道具として使われるのは木馬である。それは生きた動物としての機能はなく、幼い子供の玩具にすぎない。さらに、馬は魔術では、魔女の集会の司会役¹³であり、オカルト的な色彩を帯びてくるのだ。ポールは木馬をこぐことが、かれに幸せをもたらすと確信している。ポールはバセット (Bassett) という家令と一緒に競馬の賭けをしており、無心で木馬をこぐ時に、勝ち馬の名前が心に浮かぶことになる。ロレンスは競馬の予想屋、まるで魔術師や占師の役割を少年に与えている。彼は金や派手な生活を求めてやまない母親のブルジョワ家庭の愚かさを自分では意識をせず、告発する存在でもある。また木馬は子供の玩具から呪術師のもつ呪物¹⁴といった役目をになうことになる。

Yet the wooden horse standing “in an arrested prance in the boy’s bed room” (*LAH* 94), is what Paul needs; for he cannot put away childish things. Despite his coy answer to his mother that “till I can have a *real* horse, I like to have *some* sort of animal about” (*LAH* 93), we feel sure that the fetish is more vivid than the real thing is ever likely to be.¹⁵

呪物である木馬をあやつる少年は呪術師であり、魔術師であり、神に選ばれた者でもある。母親との会話で、ポールは「ぼくはついているんだ。神様がぼくに教えてくれたよ」と主張する。Jungによれば、「魔術師は老賢者と同じ意味をもち、これは未開社会の呪術師の姿にまっすぐつながっている。彼はアニマと同様に不死のデーモンであり、これはただ生きているという渾沌とした暗闇を意味の光で照らし出す。」¹⁶したがって、エンディングで母親に自分の愚かな

過ちに気づかせるという点で、ポールは闇を照らす者というプラスのイメージももっているであろう。

木馬はさらに、思春期になろうとしている少年のセクシュアルな行為、自慰ともなんらかの関連をもっていると考えられる。¹⁷ それは、母親の金銭にたいする飽くことなき欲望を満たす助けをしなくてはならない少年ポールのある意味での代償行為でもある。したがって、木馬をこぐ少年の様子をロレンスは前述の引用のように、「狂ったように」とか「ギラギラした眼つきで」と描いていくのだ。ポールにとり木馬は「秘密中の秘密」なのだ。

Paul's secret of secrets was his wooden horse, that which had no name. Since he was emancipated from a nurse and nursery governess, he had had his rocking-horse removed to his own bedroom at the top of the house.

"Surely you're too big for a rocking-horse!" his mother had remonstrated.

"Well, you see, Mother, till I can have a *real* horse, I like to have *some* sort of animal about," had been his quaint answer. (p. 241)

かれが競馬の予想をするためには、靈感を与えてくれる木馬が不可欠なものなのだが、同時に、それは親には秘密の性的遊びでもあるのだ。かれが機械的に木馬をこぐ行為は、“self-violation”¹⁸ でもあるが、さらに、それは宗教的儀式でもあり、前述のように木馬は呪術師の呪物なのだ。

Upon this full sense of the sacredness of Paul's secret depends our appreciation of the profanity of the mother's final intrusion upon the private rites of her first-born. Yet Paul's private ceremony is a perversion of the religious spirit; it destroys his capacity to wonder, and it destroys his capacity to create.¹⁹

木馬を競馬の勝ち馬を当てるといふ賭博に使うことで、ポールは無心な子供の玩具としての本質を歪め、さらに聖なるリチュアルとしての行為を犯し、かれの創造力さえも台無しにしているのである。

ストーリーは、ポールとバセット (Bassett)、そして伯父のオスカー (Oscar Cresswell) が三人でパートナーとなって、ポールのレースにおける予想を利用して、大金を勝ちとることになる。ポールが手にした大金は、金にとり憑かれたといってもよいポールの母に、誕生日のプレゼントとして毎年 1000 ポンドづつ贈られることになる。それでも貪欲な母親は満足しないのだ。母はいっぺんにポールの競馬で稼いだ金をもらいたいのだ。ポールの競馬にたいするのめり込みは常軌を逸することになり、かれの眼つきは荒々しく、狂気でぎらぎらと燃える火のようになる。ダービーの勝ち馬の予想がつかず、神経をすりへらした主人公は、かれのなかで何かが爆発したように荒々しく、奇妙な目つきになる。

ダービーの二日前の夜にポールの両親はパーティに出掛けることになる。何か不安にかられた母親はパーティから退席して家に帰ってくる。息子はパジャマ姿で気が狂ったように、木馬を走らせている。

Then suddenly she switched on the light, and saw her son, in his green pyjamas, madly surging on his rocking-horse. The blaze of light suddenly lit him up, as he surged the wooden horse, and lit her up, as she stood, blonde, in her dress of pale green and crystal, in the doorway.

“Paul!” she cried. “Whatever are you doing?”

“It’s Malabar!” he screamed, in a powerful strange voice. “It’s Malabar!”

His eyes blazed at her for one strange and senseless second, as he ceased urging his wooden horse. Then he fell with a crash to the ground, and she, all her tormented motherhood flooding upon her, rushed to gather him up. (p. 242)

ポールの予想どおりに、ダービーでは「マラバー」が一着になり、八万ポンドの大金を母親は手にすることになるが、ポールは意識を回復せず死んでゆくのだ。母親はもちろんのこと伯父のオスカーにしてもバセットにしても、ポールの予想のお陰で大金をせしめることになる。そういった意味では、この短編小説にでてくる大人の登場人物はすべて、自分の欲望を満たすために生きている。そしてその大人たちの飽くことなき金銭欲の犠牲になるのが主人公の少年なのだ。したがって、オスカーが姉に向かっていう「ヘスター姉さん、あなたは八万ポンドを手にしたのさ。かわいそうな息子を亡くしたかわりにね。でもあの子はこの世を抜け出し、勝ち馬を探して木馬を走らせているんだよ」(p. 242)というエンディングの言葉もしらじらしく聞こえるのだ。ロレンスは現代社会の金銭第一主義をオカルト的力を持った少年の死によって、告発しているのである。また、かれに予想の靈感を与えてくれる呪物である木馬は所詮、生きた生命力を持つ馬にはなれない。Ad de Vriesによれば、馬は「死の木を表す：たとえば中世では棺台を〈聖ミカエルのウマ〉“St Michael's horse”と呼んだ。現代ペルシア語で「棺」を表す単語は、〈木のウマ〉を意味する」²⁰という。したがって、少年の死はあらかじめ決められていたことなのだ。

ロレンスは『息子と恋人』で息子と母の強い愛の絆と、キリスト教からのポールの解放を描いたが、この短編小説では、母に愛されていない子供ポールを主人公にし、しかもかれにオカルト的力を与えて一時的な成功をおさめさせる。しかし、少年の死により初めて母が子に対する愛を感じるという情景をアイロニカルに描いている。この短編では父親の存在は母親の存在に比べて、影がうすく希薄である。これは主人公ポールにとり、母にたいする愛着が異常に強いことを暗示しているのだ。その面では少年はまだ幼児的性格から抜け出していないといえる。木馬がかれに必要なのもそれに由来しているともいえよう。

その乳児期、母親の懐に抱かれた母子一体の共生的段階にある子供は、母の瞳を見つめ、そこに映る彼女の望むもの、母の渴望する対象になりたいと思う。当然の帰結として、子供は母の欲望の対象に同一化することで、

彼の欲望は母親の欲望の欲望として形成されてくる。

こうして、母の欲望を介した連続性の中で、自他内外の区別を見失う子供は、母の欲望の複製として自己の欲望を見だし、母の微笑む外部の鏡像に自己の収束点を見て、自己疎外的な像のまわりに自分というものを作り上げていくことになる。²¹

父の存在の希薄なことが、子供が母の欲望の呪縛から離れられない原因であろう。

また冒頭で述べたように、オカルト的なものに対するロレンスの興味は、この短編以外にも多々見ることができる。それは文明から逃避したいという欲求よりも、むしろ、どこかに到着したい、その存在を本能的に信じている潜在意識と結びつきたいという欲求であろう。²² このどこかに到着したいという欲求は、ポールの言葉の “He knew he could get there.” (p. 233) や “if I could ride my horse, and *get* there, then I’m absolutely sure. . .” (p. 243) にも明確である。ポールにとりその「どこか」は、かれに幸せをもたらすところなのだ。つまりは、競馬の勝ち馬をうまく予想することなのだ。

さらに Colin Wilson によれば、「ロレンスの作品すべてが、文明が新しい方向をとること、知能だけを発達させるかわりにあの〈別の〉力を発展させる努力に集中することを問題にしている」²³ という。「別の」力というのは、ウィルソンの主張する X 機能的なもの²⁴ であろうが、そういった意味でもロレンスとオカルティズムとの密接な接点があると思われる。

象徴の原義は（繋ぎ^{つな}あわせる）を意味するギリシャ語 (SYMBALLO) に由来している。そしてそれは（認知の徴）を意味する (SYMBOLA) と関係がある。古代に於て主人は客を迎える時に器^{うつわ}を壊してかけらを客に与え、再び会う時にそれを繋ぎ合わせて認知の印としたと言われている。従って象徴とはもともと秘密の符牒のようなものであった。そしてこの秘密の符牒が不可知で神秘的なこと、宇宙の神秘への奥義の徴となり、ひと

つの体系をなす時、既にシンボリズムはオカルティズムなのである。

ロレンスが生涯に亘って追求した（人間の再生）の現代的な神話としか言いようのないものは、文字どおり形而下的リアリズムよりも秘儀的シンボリズムによって表現されるに相応しいものである。特に晩年の彼の作品は、厳密な意味での形而上的リアリティは神話や象徴によってのみ接近が可能であることを良く示している。²⁵

上の引用の『死んだ男』論で、ロレンスのシンボルと神話さらにオカルティズムについて橋本氏が主張する通りに、「木馬の勝ち馬」という作品は童話や寓話の形式を用いて、現代社会の拝金主義や物欲を厳しく告発したもので、その中には作家ロレンスのオカルティズムへの深い関心と共感がみられるのである。主人公ポールの木馬を呪物として用いた競馬の勝ち馬の予想、母のための大金の獲得、その精神的ストレスとかれの結末での不幸な死は、まさにそういった大人たちの愚かさや合理性への偏向がその原因なのであり、ロレンスは感性の復活をめざすオカルト的世界に憧れと共感を抱いていたのであろう。とくに、ロレンスの後期の作品はシンボルや神話といった視点から書かれていることも、かれのオカルティズムに対する並々ならぬ関心や興味に関連があると思われる。

1931年にロレンスの *Apocalypse* が出版されるが、これは「ヨハネの黙示録」のなかにキリスト教の裏面史をたどり、キリスト教以前の異教的な神話の影響を読みとっている。ロレンスによると、「黙示録」は大衆の権力渴望と同時に、壮大な宇宙の観念、さらに終末待望の背後にある異教世界の天地と絵巻物を見せてくれるという。さらに、かれはヨーロッパ精神史におけるオカルト的象徴の意味を考察している。これを見てもロレンスのオカルティズムに対する深い関心を読みとることができる。このロレンスの死後出版された『黙示録』の最後の言葉は、「木馬の勝ち馬」の拝金主義の母やその犠牲となる息子ポールを救う道が確実にあるということを示唆しているのではなかろうか。

What we want is to destroy our false, inorganic connections, especially those related to money, and re-establish the living organic connections, with the cosmos, the sun and earth, with mankind and nation and family. Start with the sun, and the rest will slowly, slowly happen.²⁶

註

- ¹ Carol Sklenicka, *D. H. Lawrence and the Child* (Univ. of Missouri Press, 1991), p. 157.
- ² Kingsley Widmer, *The Art of Perversity, D. H. Lawrence's Shorter Fictions* (Univ. of Washington Press, 1962), p. 92.
- ³ Graham Hough, *The Dark Sun, A Study of D. H. Lawrence* (Gerald Duckworth & Co. Ltd, 1956), p. 188.
- ⁴ See Michael Goldberg, "Lawrence's 'The Rocking-Horse Winner': A Dickensian Fable?", *Modern Fiction Studies* (Purdue Univ., 1969-1970), vol. XV, 525-536.
- ⁵ ミルチャ・エリアーデ編『エリアーデ・オカルト事典』鶴岡賀雄他訳 (法蔵館, 2002), p. 13.
- ⁶ *Shorter Oxford English Dictionary*, p. 1355.
- ⁷ 紀田順一郎「オカルトの系譜」, 『英語研究』 vol. 63 (研究社, 1975), 6.
- ⁸ Mircea Eliade, *Occultism, Witchcraft, and Cultural Fashions* (Chicago, 1976), 『オカルティズム・魔術・文化流行』楠正弘訳 (未来社, 1978), p. 152.
- ⁹ Colin Wilson, *The Occult* (Bolt & Watson Ltd., 1970), 『オカルト』上巻, 中村保男訳 (河出書房, 1995), p. 185.
- ¹⁰ D. H. Lawrence, "The Rocking-Horse Winner", *The Woman Who Rode Away and Other Stories* (The Cambridge Edition, 1995), p. 230. 以下, 本

稿の引用ページはこの版による。

- 11 『オカルト』上巻, pp. 299-300.
- 12 Ad de Fries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (North-Holland Co., 1976), 『イメージ・シンボル事典』山下圭一郎訳 (大修館, 1989), p. 343.
- 13 『イメージ・シンボル事典』, p. 343.
- 14 John F. Turner, "The Perversion of Play in D. H. Lawrence's 'The Rocking-Horse Winner'", *The D. H. Lawrence Review*, fall (1982), 257.
- 15 John F. Turner, 257.
- 16 Carl Gustav Jung, *Von den Wurzeln des Bewußtseins* (Zürich, 1954), 『元型論 — 無意識の構造』林道義訳 (紀伊国屋書店, 1982), p. 83.
- 17 See W. D. Snodgrass, "A Rocking-Horse: The Symbol, the Pattern, the Way to Live," *The Hudson Review*, XI (1958), 191-200.
- 18 John F. Turner, 259.
- 19 John F. Turner, 264.
- 20 『イメージ・シンボル事典』, p. 345.
- 21 福原泰平 『ラカン — 鏡像段階』 (講談社, 1998), pp. 75-76.
- 22 『オカルト』上巻, p. 62.
- 23 『オカルト』上巻, p. 63.
- 24 『オカルト』上巻, pp. 86-88 : 『オカルト』下巻, p. 517 & p. 535. ウィルソンはX機能は「何らかの潜在的な感覚... あるいは感覚とは別の何らかの欲望」であり, 人間の未来はこのX機能の育成にかかっているという。それは従来の顕微鏡的視覚にかわるもの, それとともに育成されるべき「第6感覚」ともいえる望遠鏡的な巨視的ヴィジョンであると主張している。
- 25 橋本楨矩「ロレンスの再生と隠密主義 — 『逃げた雄鶏』試論」, 『ユリイカ — オカルティズム』 (青土社, 1974), 224.
- 26 D. H. Lawrence, *Apocalypse and the Writings on Revelation* (The Cambridge Edition, 1980), p. 149.